

神楽田遺跡発掘調査報告書

2023

宇治市教育委員会

序

宇治市では、現在、「一人ひとりが輝き 伝統と新たな息吹^{いぶき}を紡ぐ^{つむ}まち・宇治」を目標に、住みたい・住んでよかったと思える「ふるさと宇治」となるため、宇治川を中心とした美しい景観や歴史を感じることができる魅力あるまち並みを守るとともに、宇治の伝統や歴史を新しい時代に伝え、さらに発展するまちを目指し、文化財の保存・活用及び情報発信等の推進に務めているところです。

また、第2次宇治市教育振興基本計画においても、「家庭・学校・地域でささえる宇治のひとづくり・まちづくり」を教育理念に、貴重な宇治の歴史や文化を世界に発信し、未来に継承し、歴史資料や伝統文化を保存・活用することで、市民の歴史文化意識の醸成を目指しており、史跡の整備や文化的景観の修理事業などの文化財行政の推進を図るとともに、文化財に関する調査・研究から得られた成果の教育普及に努めています。

今回、発掘調査を行った小倉地域は、干拓事業によって現在のような田畑や宅地などに変わるまでは広大な巨椋池が広がり、池のほとりに位置する微高地は、弥生時代より集落が存在していたことが確認されています。本書はニンテンドーミュージアムの開設に先立ち、土地に刻まれた歴史を記録するために実施した発掘調査の成果を報告するものです。

調査では弥生時代の土器が出土した土坑のほか、平安時代末から鎌倉時代にかけての土師器皿が出土した土坑など多数の遺構と遺物が見つかりました。これらは、今後、周辺の状況が詳らかになるに従い、まちの変遷^{つまび}を知る手掛かりとなるでしょう。

末筆になりましたが、本調査の実施や報告書の作成にあたって、文化財の保存にご理解とご協力をいただいた任天堂株式会社をはじめとする関係機関、関係各位、ご支援をいただきました市民のみなさまに対して心より厚くお礼を申し上げます。

令和5年12月

宇治市教育委員会

教育長 木上 晴之

例 言

- 1 本書は、宇治市教育委員会が宇治市小倉町神楽田46番1で令和4年2月1日から同年4月21日まで実施した神楽田遺跡発掘調査報告書（宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第94集）である。
- 2 本書で使用する座標は、I T R F（国際地球基準座標系）に準拠した世界測地系国土地標第VI系を用いた。地図中で方位記号の指し示す方角は、座標北である。また、高さの基準面には、東京湾平均海面（T. P.）を用いた。
- 3 本書の土層色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（農林水産省農林技術会議事務局監修・日本色彩研究色標監修）第24版（2002）に従った。
- 4 本書に収録する遺物・調査資料は、宇治市歴史資料館が保管している。
- 5 本書の収録遺物に関する作業は、笠嶋良美、河野マミが行った。
- 6 本書の執筆作業は、浅田洋輔が担当した。図表・写真に関する作業は、大崎拳斗、久後千穂が担当した。
- 7 本書の編集は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当し、実務は大崎、久後が行った。
- 8 調査面積は、約308.64㎡であった。
- 9 本書で使用する遺構略号は、次のとおりとする。

略号	対応遺構	備考
S P	柱穴	円形でおおむね直径30cm以下のものをいう。
S K	土坑	土器溜まりを含む。
S X	性格不明遺構	

目 次

本文目次

第1章	位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2章	近隣における過去の調査・・・・・・・・・・・・・・・・	4
第3章	調査の体制と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
第4章	検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
第5章	出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
第6章	まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
抄録		

挿図目次

第1図	位置図
第2図	周辺調査地図
第3図	トレンチ配置図
第4図	A調査区土層断面図
第5図	A調査区上層平面図
第6図	B調査区土層断面図・上層平面図
第7図	A調査区遺構出土遺物実測図
第8図	A調査区包含層出土遺物実測図
第9図	B調査区遺構出土遺物実測図

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

神楽田遺跡は、宇治市小倉町神楽田・老ノ木に位置する集落遺跡である。当地は、かつて平野部の西側に広がっていた旧巨椋池の東岸付近にあたる。周囲の宇治川旧流路によって形成された氾濫平野に対する微高地である自然堤防上にあり、集落が形成されるのに適した地形となっている。

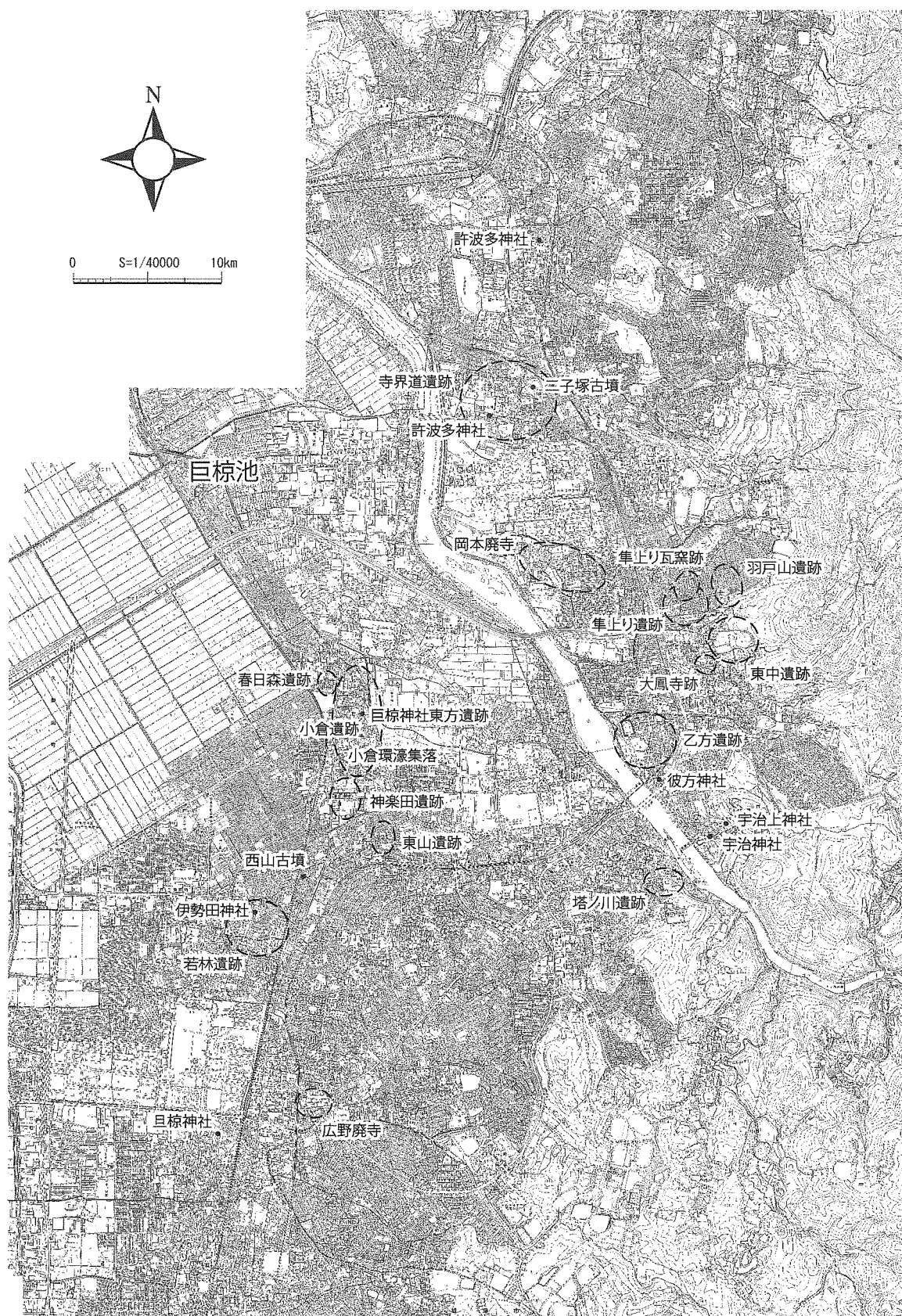
第2節 歴史的環境

宇治市には旧石器時代から近世にかけて多くの遺跡が存在している。それらの中で最も古い時代の人の活動の痕跡がわかるもののひとつとしては、五ヶ庄にある二子塚古墳の墳丘盛土から出土した旧石器時代のナイフ形石器が知られている。この遺物は遺構から出土したものではないが、二子塚古墳の周囲に広がる寺界道遺跡における発掘調査では、弥生土器片が出土するにもかかわらずその時代の遺構が見つかっていないことから、近隣の弥生時代の遺構が存在する地層の土を利用して墳丘盛土としたのではないかと考察されており、このナイフ形石器も同様に墳丘盛土を採取した場所に旧石器時代の遺構があったのではないかと考えられる。その後の時代の宇治市内の遺跡としては、縄文時代早期の隼上り遺跡や、縄文時代後期の寺界道遺跡と塔ノ川遺跡、弥生時代中期の乙方遺跡や若林遺跡などが知られているが、小倉地域ではこれらの時代の遺構・遺物は確認されていない。

この地域において人の活動の痕跡が確認されるようになるのは、弥生時代後期になってからのことである。今回発掘調査を行った神楽田遺跡では昭和52年に発掘調査が行われており、2基の土坑から弥生時代後期の甕が出土している。また、神楽田遺跡の北に隣接する小倉遺跡でも昭和55年及び昭和63年に行われた発掘調査で包含層や遺構から弥生土器片が出土している。これらのことから、この地域の広い範囲では弥生時代後期に集落が存在していたことが推測される。

この地域における古墳時代の遺跡は、西山古墳と小倉遺跡、東山遺跡が存在する。宇治市内には木幡や宇治の丘陵部などを中心に多数の古墳が存在しているが、この地域で確認されている古墳は小倉地域の南西に位置する段丘の北西端に存在する西山古墳のみである。伊勢田から小倉にかけての地域に複数存在していたとされている古墳の中で唯一現存するものであり、発掘調査により古墳時代後期の石室が確認されている。この地域において確認されている古墳時代の集落遺構は、小倉遺跡の古式土師器の破片が少量出土した土坑のみである。東山遺跡は、かつて畑から須恵器などの遺物を表採したのみであるため、詳細についてはわかっていない。そのため、この地域における古墳時代の様相は、西山古墳以外は明らかとなっていない。

宇治市内には古代の遺跡として大鳳寺跡や岡本廃寺、広野廃寺などの寺院や、隼上り瓦窯跡などの生産遺跡、寺界道遺跡や東中遺跡などの集落遺跡といった飛鳥時代から奈良時代の遺跡が多数存在しているが、現在のところこの地域では見つからない。



第1図 位置図

この地域において再び人の活動の痕跡が確認されるようになるのは、平安時代後期になってからである。先述した昭和52年の神楽田遺跡の発掘調査や昭和63年の小倉環濠集落の調査、平成11年に行われた春日森遺跡の調査において平安時代後期から室町時代にかけての土師器や瓦器などを含む中世の遺構や遺物が見つかっている。宇治市史や先述した小倉環濠集落の発掘調査概報では、当地域に環濠集落の特徴が残されているとされていたが、宇治市遺跡地図2002年版において小倉集落で確実な環濠が見当たらないことを踏まえ、小倉環濠集落と重複している巨椋神社東方遺跡を1つの集落遺跡として小倉遺跡に統合している。

安土桃山時代になると、豊臣秀吉の伏見城築城に合わせて宇治川や巨椋池において大規模な治水工事が行われた。その目的は、それまでは狭隘な谷部から流れ出るとほどなく巨椋池に流れ込んでいた宇治川の流れを横島堤などの太閤堤の築堤によって伏見城下に導き、伏見城下の水運の利便を図るとともに伏見城の外堀として機能させることを意図したと解釈されている。また、巨椋池に小倉堤を築造し、その上に大和街道を新設するとともに宇治橋を撤去することで旧来の宇治橋経由の大和街道を廃し、都と奈良の間の交通を大和街道に集約することで交通網を掌握しようとしたと考えられている。当地が新しい大和街道に沿う街村として整備されたことと、江戸時代に微高地であるこの地域で茶の生産が盛んに行われたことにより、現在の大和街道沿いの集落が形成されていったと考えられる。

当地域を含む平野部の西半分に広がっていた巨椋池は、洪水時の遊水地として存続していたが、明治43年に竣工した淀川改修工事により、淀川本流から切り離されたことによって旱ばつと悪水循環による湿害などに悩まされるようになった。また、巨椋池において行われていた淡水漁業も漁獲量が減少し続けていた。悪水循環などで被害を受けている農村の救済と従来の漁獲量が得られなくなっていた漁業者の保護など多くの問題解決が求められていたことと、国の食糧増産政策が相まって昭和8年から同16年にかけて634.8haにも及ぶ干拓事業が行われ、広大な面積を誇った巨椋池は消滅し、現在は農地となっている。

第2章 近隣における過去の調査

宇治市内ではこれまで多数の発掘調査が行われているが、小倉町内における調査の事例は少ない。今回の調査地近隣では、発掘調査を行った神楽田遺跡の他、北に位置する小倉遺跡や春日森遺跡、南西に位置する西山古墳において計6回の調査が行われている。

この地域でも他の地域と同様に開発行為に先立ち試掘調査を多数行っているが、本発掘調査が必要となったものは多くない。以下に近隣における過去の調査歴と神楽田遺跡の試掘調査の成果についてまとめる。

① 昭和52年度の調査

今回の調査地の南西約120 m地点の神楽田遺跡において行われた小倉町内における初めての発掘調査では、弥生時代後期末の甕が出土した土坑の他、埋土から平安時代後期～鎌倉時代初頭の土師器や瓦器が出土した井戸などが見つかった。

② 昭和55年度の調査

今回の調査地点の北北東約630 mの地点の小倉遺跡（旧名：巨椋神社東方遺跡）において行われた発掘調査では、遺構を確認することはできなかったが、調査区の壁面より弥生土器の甕が数個体分出土した。

③ 昭和63年度の調査

今回の調査地点の北北西約700 m地点の小倉遺跡（旧名：小倉環濠集落）において行われた発掘調査では中世の土坑や溝などが検出され、土師器や瓦器など中世の遺物のほか、土坑や包含層から混入遺物とみられる弥生土器が出土した。

④ 平成11年度の調査

今回の調査地点の北北西約710 m地点の春日森遺跡において行われた発掘調査では、溝・土坑・ピットなどの集落遺構が検出され、平安時代後期を中心とした土師器などの遺物が出土した。

⑤ 平成22年度の調査

今回の調査地の南西約560 m地点の西山古墳において行われた発掘調査では、両袖式の横穴式石室を検出し、石室を保護するために盛られた現代盛土層から、周囲の遺跡に埋蔵されていた遺物と思われる弥生時代後期と推定される弥生土器甕の破片や庄内期中葉の有孔鉢底部、打製石鏃などが出土した。

⑥ 神楽田遺跡の試掘調査

今回の調査地の北西約160 m地点において平成22年度に行われた試掘調査では、遺構や遺物は確認できなかったが、巨椋池東部の沼状地形によるものと考えられるシルト層の堆積が確認された。

以上のような、近隣における調査成果を考慮すると、小倉町内では今回調査を行った神楽田遺跡と隣接する小倉遺跡の南北約800 mの範囲で弥生時代後期の遺構や遺物が確認され、平安

時代後期から鎌倉時代の遺構や遺物も同じ範囲で確認されていることから、今回の調査地においても巨椋池東岸付近における弥生時代後期及び平安時代後期から鎌倉時代の集落遺構が確認されることが期待された。



第2図 周辺調査地図

第3章 調査の体制と経過

第1節 調査の体制

調査は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づいて宇治市教育委員会が実施したものであり、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が実務を担当した。

発掘調査組織は、次のとおりである。

<発掘調査責任者>

宇治市教育委員会 教育長 岸本文子（令和5年10月11日まで）
同 木上晴之（令和5年10月12日から）

<発掘調査事務局>

宇治市都市整備部部长 久下 伸（令和5年3月31日まで）
同 米田晃之（令和5年4月1日から）
同部副部长 米田晃之（令和5年3月31日まで）
同 藤井康博（令和5年4月1日から）
同部歴史まちづくり推進課長 谷口弘明（令和4年3月31日まで）
同 谷澤 潔（令和4年4月1日から）
同課副課長兼景觀係長 大谷由欣代

<発掘調査担当>

同課文化財保護係長 齊田雄太（令和4年3月31日まで）
同 大野壽子（令和4年4月1日から）
同係主任 大野壽子（令和4年3月31日まで）
同 松村 真
同 岡紗佑里（令和5年1月1日から）
同 浅田洋輔（令和5年1月1日から）
同係主事 岡紗佑里（令和4年12月31日まで）
同 浅田洋輔（令和4年12月31日まで）
同係会計年度任用職員 荒川 史（令和4年3月31日まで）
同 橋本拓也（令和4年3月31日まで）
同 久後千穂
同 大崎拳斗（令和4年4月1日から）

<発掘作業>

やましろ文化財株式会社

<指導機関>

京都府教育庁指導部文化財保護課

第2節 調査の経過

ア 届出と通知

(ア) 届出

令和3年6月11日付けで、任天堂株式会社 代表取締役社長 古川俊太郎氏より、文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財の発掘に係る届出が提出された。これは、ニンテンドーミュージアムの開設に伴うものである。

(イ) 通知

京都府教育委員会から令和3年6月29日付けで発掘調査の実施に係る通知を受け、発掘調査を行うことになった。

イ 発掘調査の実施

(ア) 試掘調査

昭和52年の隣接地における発掘調査において遺構が確認されており、工事計画予定地においても遺構が存在する可能性が高いことから、初めに試掘調査を行い遺構の有無を確認することとした。

試掘調査は、令和3年7月17日に行った。3か所に5×5mの調査区を設定した。敷地の南西に設定したA調査区では、現地表より1.0m下において黄褐色細粒砂の地層に遺構と思われるものが複数確認された。昭和52年度の調査でも同様の地層を確認していたが、当時は遺構面と認識されておらずこの下の沖積砂礫層の上面において調査を行っていたため、一部断ち割りをを行い下層の堆積状況を確認した。掘り下げを行うと、現地表より1.4m下において昭和52年度の調査で遺構面と認識した地層を確認することができたが、遺構・遺物は確認されなかった。

敷地の北東に設定したB調査区では遺構を確認することはできなかったが、A調査区と同じ地層の堆積状況を確認した。

敷地の北に設定したC調査区ではA・B調査区と比べて深くまで地盤改良が施されていたが、現地表より1.2m下において他の調査区と同様の堆積状況を確認することができた。

以上の試掘調査の成果からA調査区以外では遺構と思われるものが確認できていないが同様の地層の堆積が広がっていることから他の地点でも遺構が存在する可能性があることが考えられた。

(イ) 本発掘調査

試掘調査の成果より、本発掘調査が必要であると判断されたことから事業者と発掘調査についての協議を行い、令和4年2月1日から本発掘調査を実施した。

調査区名は試掘調査で付与した名称をそのまま使用し、敷地南西の調査区をA調査区、敷地北東の調査区をB調査区とした。試掘調査時に敷地の北西に設定したC調査区は、試掘調査後に工法が変更されたことにより掘削が遺構面に届かなくなったことから工事着工時に立会調査をすることとした。面積が狭小であるなど諸般の事情により発掘調査が行えない部分について

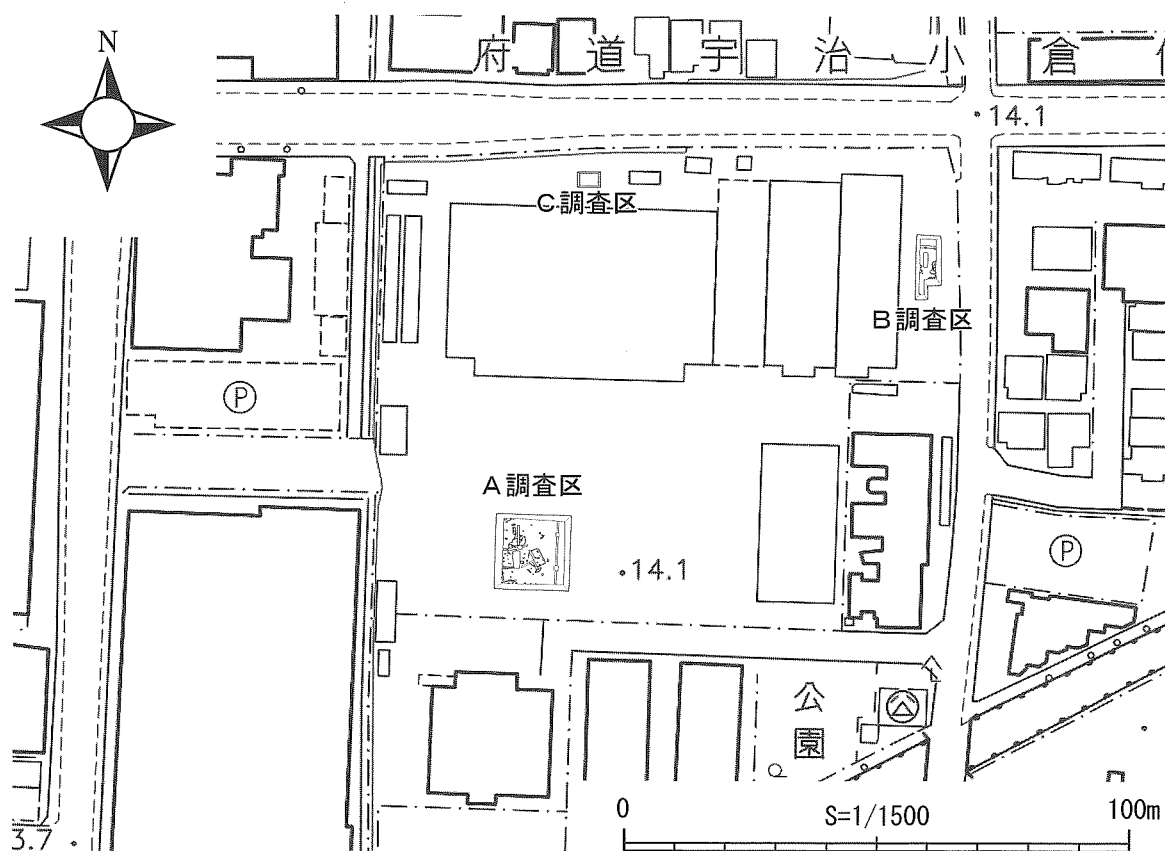
も同様に工事着工時の立会調査とした。

本発掘調査を行った面積は、A・B調査区合わせて約 308.64 m²である。

(ウ) 発掘作業

初めに、試掘調査で遺構と遺物が確認されたA調査区から調査を開始した。重機による掘削は包含層の直上まで行い、包含層を人力で掘削することにより地層の中に含まれる遺物の回収に努めた。その後は手作業により黄褐色細粒砂の地層において遺構の検出作業を行った。遺構の検出と記録作業が終わったのち、重機により下層の沖積砂礫層の上面まで掘り下げ、上層と同様に遺構の検出と記録作業を行った。今回の調査では上層において弥生時代後期末の遺構と平安時代後期の遺構が確認された。A・B両調査区とも下層では遺構・遺物が確認されなかった。本発掘調査は令和4年4月21日に終了した。調査期間は試掘調査や立会調査を含めると令和3年7月17日から令和4年9月1日までの間で83日間となり、休日や雨天中止日を除いた実質作業日数は55日間であった。

今回の発掘調査で出土した遺物の数量は、コンテナバット2箱分であった。発掘調査終了後、出土した遺物は、宇治市の文化財整理室に搬入した。



第3図 トレンチ配置図

第4章 検出遺構

今回の発掘調査で検出した遺構は、柱穴、土坑、溝、竪穴建物、その他性格不明遺構である。検出された遺構のうち、時代が判明した遺構は、ごく一部のみであった。ここでは、基本層序と主要な遺構について述べる。

第1節 基本層序

本調査はA調査区とB調査区の2か所で行った。基本層序は両調査区とも同様である。堆積状況は、上層よりアスファルトあるいは碎石の第1層、地盤改良を加えた造成土の第2層、弥生時代から近現代の遺物を含む遺物包含層の第3層、黄褐色細粒砂の弥生時代後期及び平安時代後期から鎌倉時代の遺構を検出した第4層、オリーブ褐色砂礫層の第5層であった。

第2節 主要遺構

遺構の検出作業は第4層上面及び第5層上面において行った。今回の調査で検出された遺構はA・B調査区合わせて90基であり、その内訳は、柱穴63基、土坑17基、溝9基、性格不明遺構1基であった。検出した遺構面の高さは、第4層がT・P・13.0m前後、第5層がT・P・12.3m～12.6mであった。

ア A調査区

(第4層上面)

多数の遺構が検出されたが、遺構の性格が判明したものは少ない。ピットや柱穴が多く見つかっているが、互いに組み合うものはほとんど見られなかった。以下に時期が判明した遺構及び遺構の性格が分かっているものについて記述する。

S K 18

調査区の南西部で検出した長径1.4m、短径0.6m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。遺構の埋土は黒褐色シルト質細粒砂である。弥生土器の細片が出土した。

S K 23

調査区の南西部で検出した長径0.7m、短径0.2m、深さ0.1mの楕円形の土坑である。遺構の埋土は暗褐色細粒砂である。土師器の細片が出土した。

S K 24

調査区の南西部で検出した長径0.6m、短径0.5m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。遺構の埋土は黒褐色シルト質細粒砂である。検出面付近より弥生土器甕の体部がまとまった状態で出土した。

S K 74

調査区の北西部において検出した長径0.9m、短径0.7m、深さ0.4mの不整形土坑である。遺構の埋土は上層より0.2m厚の暗褐色細粒砂、第2層が黒褐色細粒砂である。第2層から平安時代後期の土師皿が欠損のない状態で出土した他、土師器の細片や石製品などの細片が出土した。

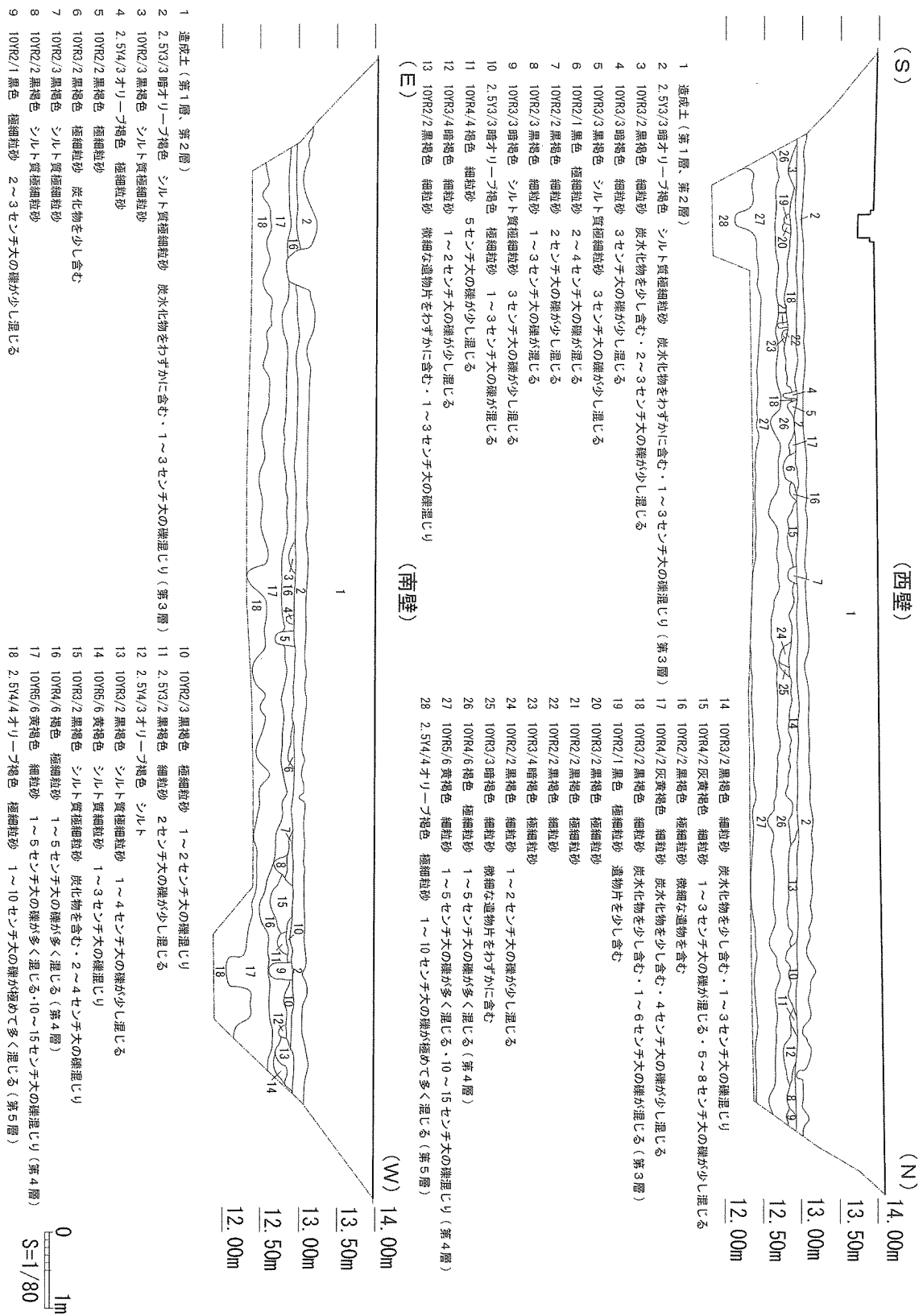


図4 A調査区土層断面図

S K 85

調査区の北西部で検出した長軸 0.2 m 以上、短軸 0.2 m、深さ 0.1 m の土坑である。南東側の半分以上が別の新しい時期の遺構によって切られているため正確な規模は不明である。遺構の埋土は暗褐色細粒砂である。遺物は土師器の細片が出土した。

S X 69

調査区の南東付近で検出した一辺 3.5 m 以上、深さ 0.1 m 以上、主軸方向は北から西に約 27° 振る遺構である。南西側をはっきりと検出することができなかったが、北東側の角がはっきりと検出されたことから方形の堅穴建物ではないかと考えられる。遺構の残存状況が比較的良好な場所でも深さが 0.1 m 程度しかない状態であり、南西側は特に状態が悪かったことからはっきりとした規模は不明である。遺構の埋土は黒褐色細粒砂である。出土した遺物が土師器の細片数点のみであったため遺構の時期は不明である。

S P 58・S P 70・S P 72

調査区の北西角付近で検出した S P 58・S P 70・S P 72 からなる南北方向に延びる柱穴列であり、主軸方向は北から西に約 1° 振っている。直径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m の柱穴が 1.6 ～ 1.7 m 間隔で並んでいる。S P 58 より北側は調査対象地外であるため検出できた 2 間分以上の続きがあるかは不明である。各柱穴で柱痕等は確認されていないが、柱穴の規模が大きいことから掘立柱建物の一部である可能性も考えられる。どの柱穴も遺構の埋土は暗褐色シルト質細粒砂である。遺物は S P 58・S P 70 から出土した土師器の細片のみであるため遺構の時期は不明である。

(第5層上面)

昭和 52 年の発掘調査では第 5 層の砂礫層の上面において遺構検出を行っていたので遺構の検出作業を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

イ B調査区

(第4層上面)

A 調査区と同様に遺構検出作業を行ったところ、A 調査区と比べると遺構の密度は低いが複数の遺構が確認できた。以下に時期が判明した遺構について記述する。

S K 81

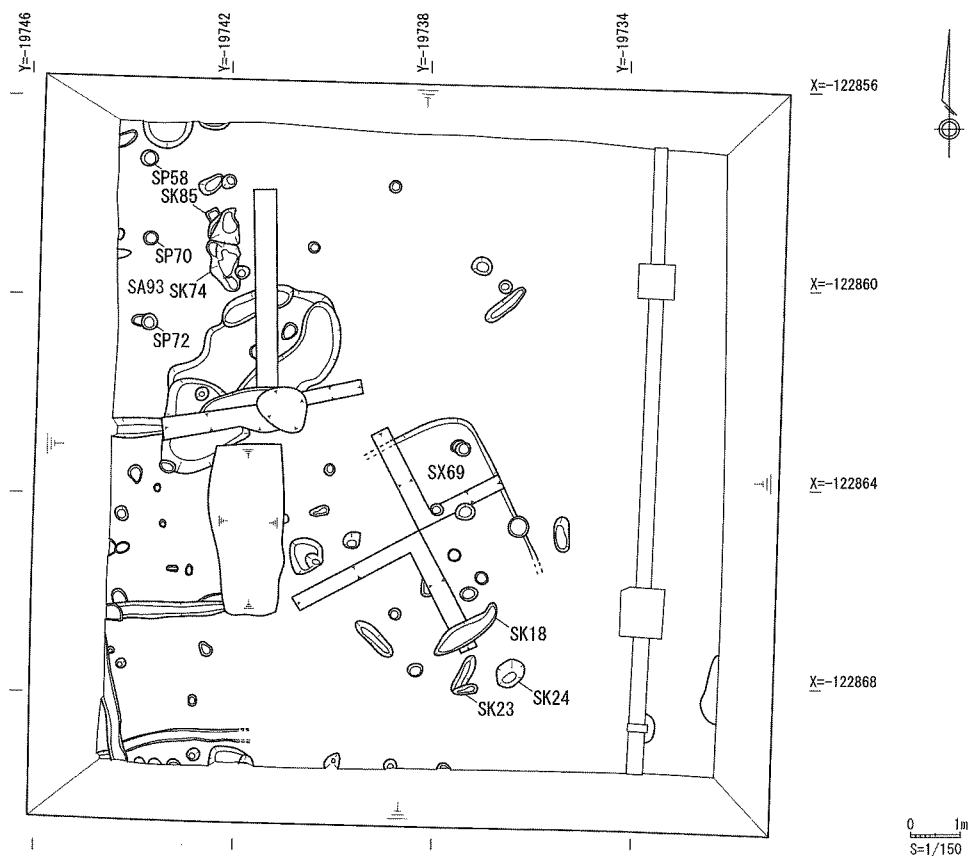
調査区の東端中央付近で検出した長径 2.2 m、短径 0.8 m 以上、深さ 0.2 m の楕円形土坑である。遺構の埋土は暗褐色シルト質細粒砂である。遺物は土師器の細片のほか、瀬戸・美濃産の磁器が出土した。

S K 83

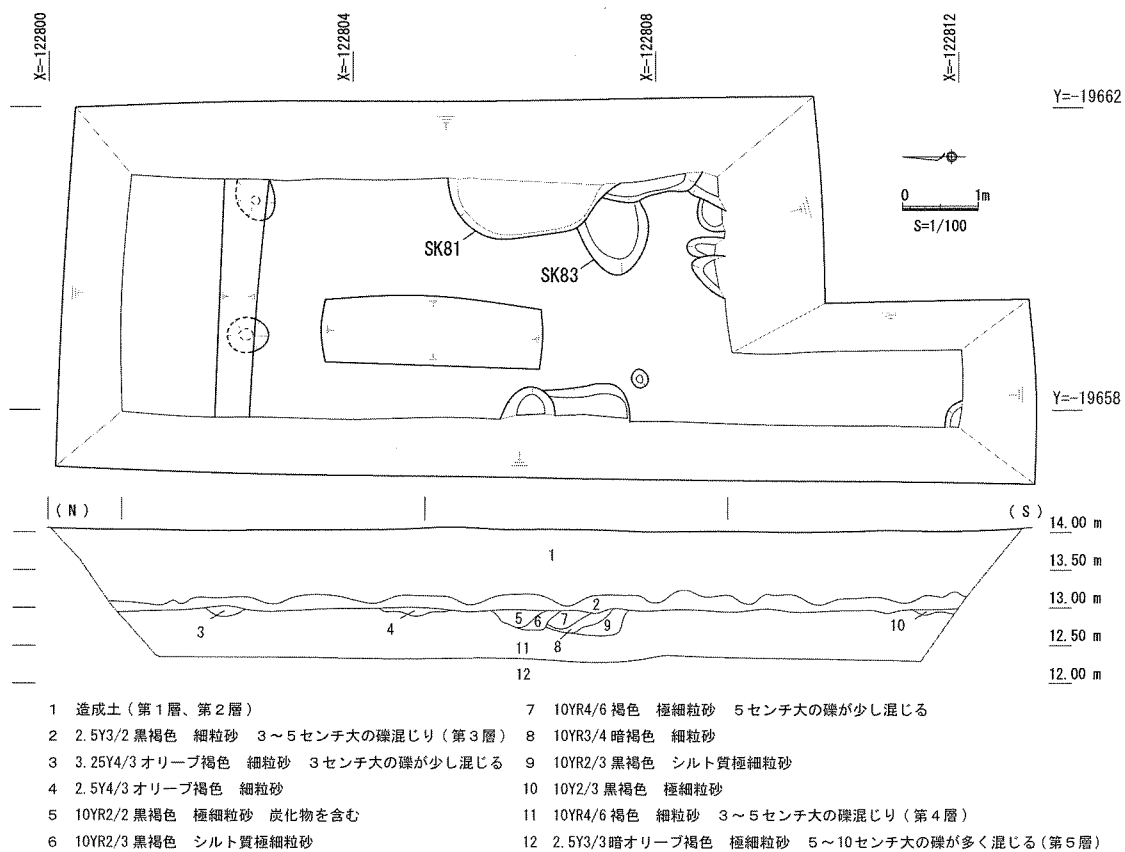
S K 81 によって切り込まれている長径 1.2 m 以上、短径 0.9 m、深さ 0.1 m の楕円形土坑である。遺物は土師器・瓦器の細片のほか、瓦器碗が出土した。

(第5層上面)

A 調査区と同様に遺構の検出作業を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。



第5図 A調査区上層平面図



第6図 B調査区土層断面図・上層平面図

第5章 出土遺物

第1節 出土遺物の概要

今回の発掘調査で出土した遺物の総量は、コンテナバット2箱分であった。出土した遺物の種類は量の多いものから弥生土器、次いで土師器、須恵器、瓦器、瓦、磁器、陶器であった。遺物の年代としては、弥生時代及び平安時代後期のものが目立つ。

出土した遺物の多くは、第4層直上の包含層（第3層）に含まれていたものである。今回の発掘調査で出土した弥生土器の多くも包含層から出土している。第4層の中には掘り下げを行った際に掘削土を確認したが、遺物は出土しなかった。

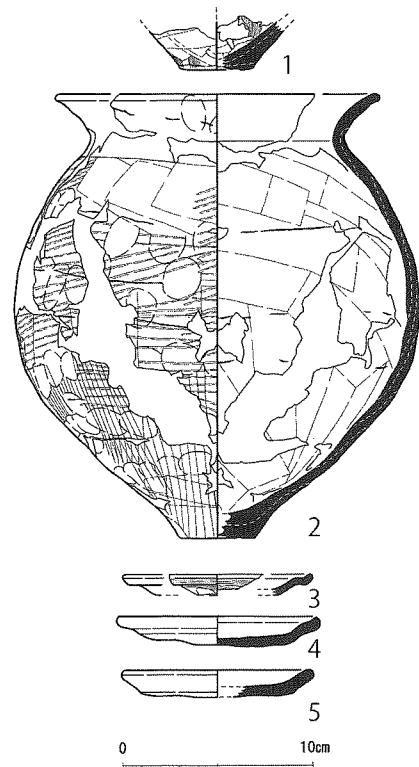
今回の発掘調査で出土した遺物は微細なものがほとんどであり、実測できるものは多くなかった。ここでは実測ができたA調査区のSK 18、SK 23、SK 24、SK 74、SK 85から出土した遺物及びB調査区のSK 81、SK 83から出土した遺物と、A調査区の包含層（第3層）から出土した遺物について報告する。

第2節 A調査区出土遺物

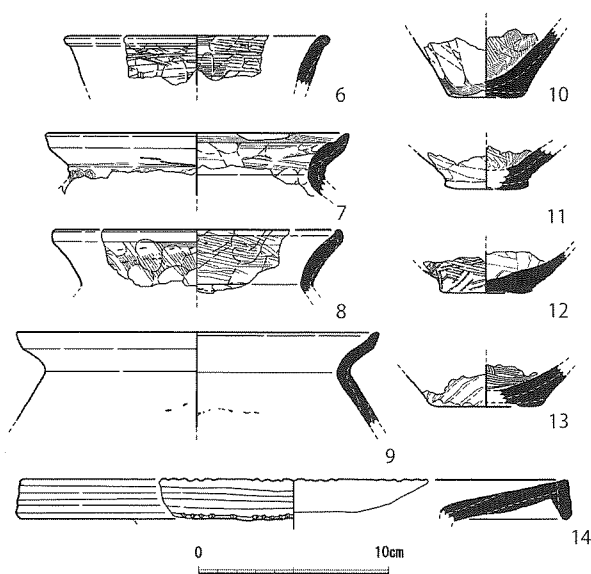
ア 遺構出土遺物（1～5）

1・2は弥生土器甕である。1はSK 18から出土した底部直径3.8 cm、残存器高2.5 cmの甕の底部である。内外面の調整は、ハケののちにナデを施している。また、内面の一部にはヘラケズリが見られ、全体に使用痕と考えられる煤が付着している。2はSK 24から出土した口縁部直径16.7 cm、底部直径3.9 cm、器高23.5 cmの甕である。外面の底部付近には縦方向のタタキを施す。体部には横方向のタタキを施したのちに板ナデを施している。内面は全体に板ナデを施したのちに底部より体部の中央付近にかけて縦方向に数条のヘラケズリを施している。体部は下膨れしており、同様のものが向日市の東土川遺跡において出土している。

3～5は土師器皿である。3・4はいわゆる「ての字状口縁」と呼ばれているものである。3はSK 85から出土した口縁部直径9.7 cm、残存器高1.1 cmの皿である。内外面にハケを施している。後述する4の土師器皿よりも器壁が薄く10世紀後半から11世紀前半のものと考えられる。4はSK 74から出土した口縁部直径10.4 cm、器高1.6 cmの皿である。3のものと比べると器壁が厚くなっており、口縁端部も3のものに

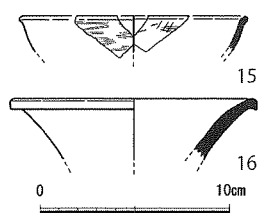


第7図 A調査区遺構出土遺物実測図



第8図 A調査区包含層出土遺物実測図

cmの甕の口縁部である。外面の頸部にタテハケを施した際に残った工具痕が残る。内面の口縁端部にはヨコハケが施されている。8は口縁部直径14.8 cm、残存器高3.3 cmの甕の口縁部である。外面はタテハケを施したのちにユビオサエにより微調整を施している。内面はヨコハケ



第9図 B調査区遺構
出土遺物実測図

を施したのちにユビナデを施す。口縁端部はヨコナデを施す。9は口縁部直径18.9 cm、残存器高5.0 cmの甕の口縁部である。摩滅しているため調整痕は確認できなかった。7～9の甕の口縁部は端部が摘まみ上げられており、近江系の特徴がみられる。10は底部直径3.8 cm、残存器高3.7 cmの甕の底部である。外面にハケの後にユビナデを施し、内面はハケを施す。11は底部直径2.4、残存器高2.2 cmの甕の底部である。外面にはイタナデを施し、内面にはハケを施す。見込みに工具圧痕が残る。12は底部直径4.8 cm、残存器高2.2 cmの甕の底部である。外面にタタキを施し、内面に板ナデを施す。見込みに工具圧痕が残る。13は底部直径4.8 cm、残存器高2.2 cmの甕の底部である。外面にタタキを施し、内面にはハケを施す。14は口縁部直径28.4 cm、残存器高2.2 cmの器台である。全体的に磨滅が著しいためはっきりとした本数は不明であるが、側縁に凹線文、上下に刺突を施す。

第3節 B調査区出土遺物 (15・16)

15はS K 83から出土した口縁部直径11.7 cm、残存器高1.9 cmの大和型の瓦器碗である。内外面にまばらにミガキを施す。

16はS K 81から出土した口縁部直径12.2 cm、残存器高5.2 cmの瀬戸美濃産の陶器である。

比べてわずかに摘まみ上げただけとなっていることから11世紀末頃のものと考えられる。5はS K 23から出土した口縁部直径9.6 cm、器高1.5 cmの皿である。体部に1段ナデを施しており、口縁部は丸みを持たせている。

イ 包含層等出土遺物 (6～14)

6～14は弥生土器である。6は口縁部直径13.1 cm、残存器高2.2 cmの長頸壺の口縁部である。口縁部付近にヨコナデを施している。内外面に複数のユビオサエの痕跡が残されている。7～13は甕である。7は口縁部直径15.8 cm、残存器高3.3

る。7は口縁部直径15.8 cm、残存器高3.3

第6章 まとめ

今回の調査により、試掘調査の成果から当初想定されていたものよりも多数の遺構を確認することができた。A調査区で検出したSK 24からは昭和52年の調査でも出土している弥生時代後期の甕がまとまった状態で出土し、SK 74からは同様に平安時代後期末の土師器皿が欠損の無い状態で出土した。これらの成果と昭和52年の調査成果を踏まえると、当地一帯の広い範囲に集落遺構が残されていることが推測できるようになった。しかし、今回検出した遺構の多くは残存状況が悪い状態で見つかっており、遺物もほとんど伴出していないことから個々の遺構の性格についてはよくわかっていない。また、今回検出した遺構は、異なる時代のものを同一の遺構面で検出しており、包含層出土遺物の中には弥生土器や土師器に混じってガラス製品などが出土していることから近現代に大きく土地の改変を受けたことで上層の遺構面が削平を受けたものと考えられる。

昭和52年度の調査成果と今回の調査成果を踏まえて集落遺構の分布域について考察すると、前回の神楽田遺跡の発掘調査では、井戸や埋甕遺構と考えられる土坑以外に建物跡や区画溝など集落遺構と断定できるような遺構は見つかっていなかったが、今回の発掘調査により遺構の残存状況は悪いが、堅穴建物と思われるSX 69や弥生時代後期の埋甕遺構と思われるSK 24など集落遺構と考えられるのを複数確認することができた。今回検出した遺構の密度を検討すると、A調査区では西側に比べて東側が少なくなっている。また、A調査区に比べてB調査区の遺構が少なくなっており、敷地の西端に位置する防火水槽部分で行った立会調査において、A調査区などと同じ地層の堆積状況が確認されたことから、集落は自然堤防上の中でも旧巨椋池に面した西側に集中していた可能性が考えられる。平成22年度の試掘調査の成果と合わせると、当地一帯の自然堤防上には弥生時代後期及び平安時代後期から鎌倉時代にかけて旧巨椋池の東岸部に集落が存在していたと推測できるようになった。また、近隣の他の遺跡の調査成果も併せて検討すると、神楽田遺跡の北に隣接する小倉遺跡の発掘調査や北西部の春日森遺跡における発掘調査でも今回の調査成果と同じ時代の遺構や遺物が見つかっていることから、東西約460 m、南北約800 mにわたる広い範囲に集落が広がっていた可能性が考えられる。小倉町内では今後も新たな知見が得られる可能性があることから、近隣において大規模開発がある際には包蔵地と隣接するような場所も含めて注意をしていきたい。

参考文献

宇治市役所『宇治市史 1 古代の歴史と景観』1973年

宇治市役所『宇治市史 2 中世の歴史と景観』1974年

宇治市役所『宇治市史 4 近代の歴史と景観』1978年

宇治市教育委員会「1. 神楽田遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第1集』1982年

宇治市教育委員会「4. 巨椋神社東方遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第1集』1982年

宇治市教育委員会「I. 昭和年度発掘調査 3. 小倉環濠集落跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第14集』
1989年

宇治市教育委員会『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』（宇治市文化財調査報告第3冊）1992年

宇治市教育委員会「I. 春日森遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第48集』2000年

宇治市教育委員会「I 寺界道遺跡発掘調査概要」『寺界道遺跡・旦椋遺跡発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査
概報第51集）2001年

宇治市教育委員会『宇治市遺跡地図 2002年版』2002年

宇治市教育委員会『西山古墳発掘調査報告書』（宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第81集）2010年

写真図版目次

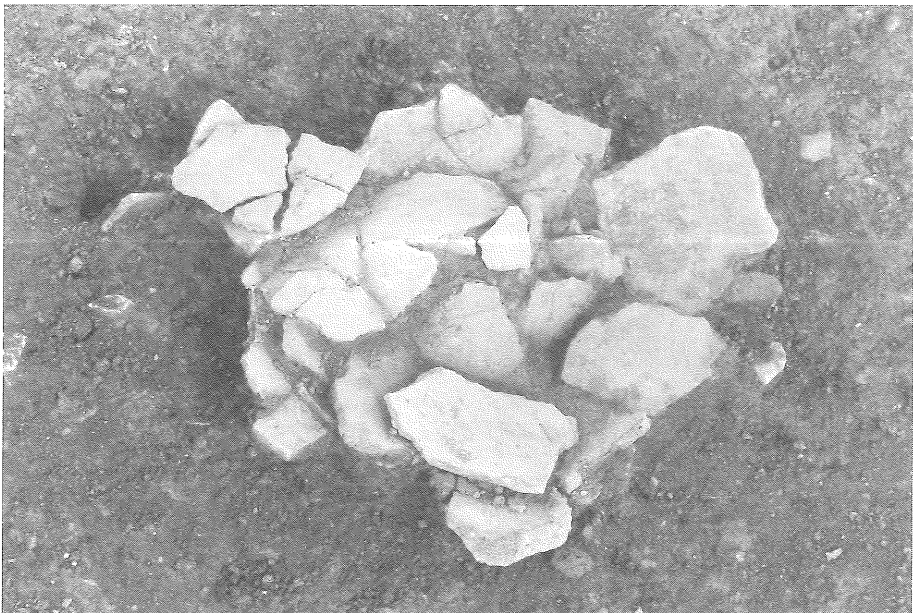
写真図版 1	1	A調査区遠景（北東から）
	2	A調査区調査前状況（北西から）
	3	S K24弥生土器甕検出状況（南から）
写真図版 2	4	S K24弥生土器甕下部検出状況（東から）
	5	S K74土師器皿出土状況（西から）
	6	A調査区第4層上面完掘状況（東から）
写真図版 3	7	A調査区第5層上面完掘状況（東から）
	8	A調査区西壁断面（東から）
	9	A調査区南壁断面（北から）
写真図版 4	10	B調査区調査前状況（北から）
	11	B調査区第4層上面完掘状況（北から）
	12	B調査区第5層上面完掘状況（北から）
写真図版 5	13	B調査区西壁断面（北東から）
	14	B調査区北壁断面（南から）
	15	C調査区第4層上面検出状況（南から）
写真図版 6	16	A調査区S K24出土遺物
	17	A調査区S K18・包含層出土遺物
写真図版 7	18	A調査区包含層出土遺物
	19	A調査区S K74出土遺物



1 A調査区遠景(北東から)

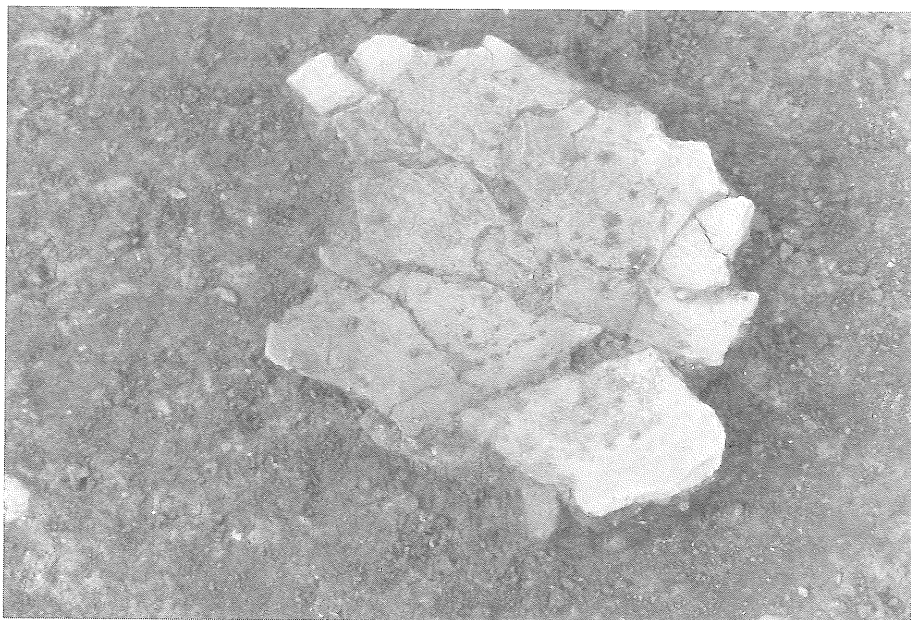


2 A調査区調査前状況
(北西から)



3 S K24弥生土器甕
検出状況(南から)

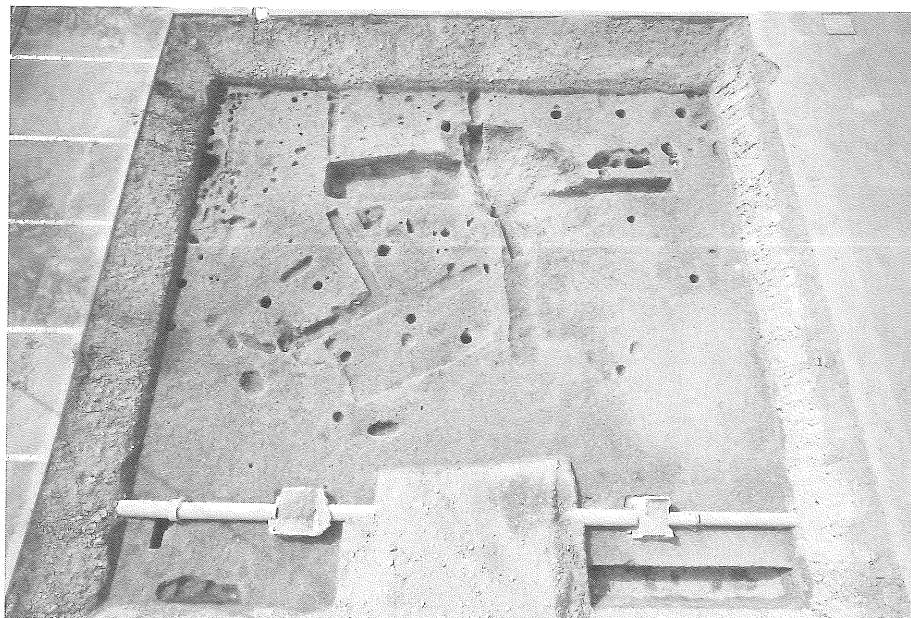
4 SK24弥生土器甕下部
検出状況（東から）



5 SK74土師器皿出土状況
（西から）



6 A調査区第4層上面
完掘状況（東から）





7 A調査区第5層上面
完掘状況（東から）



8 A調査区西壁断面
（東から）



9 A調査区南壁断面
（北から）

10 B調査区調査前状況
(北から)



11 B調査区第4層上面
完掘状況(北から)

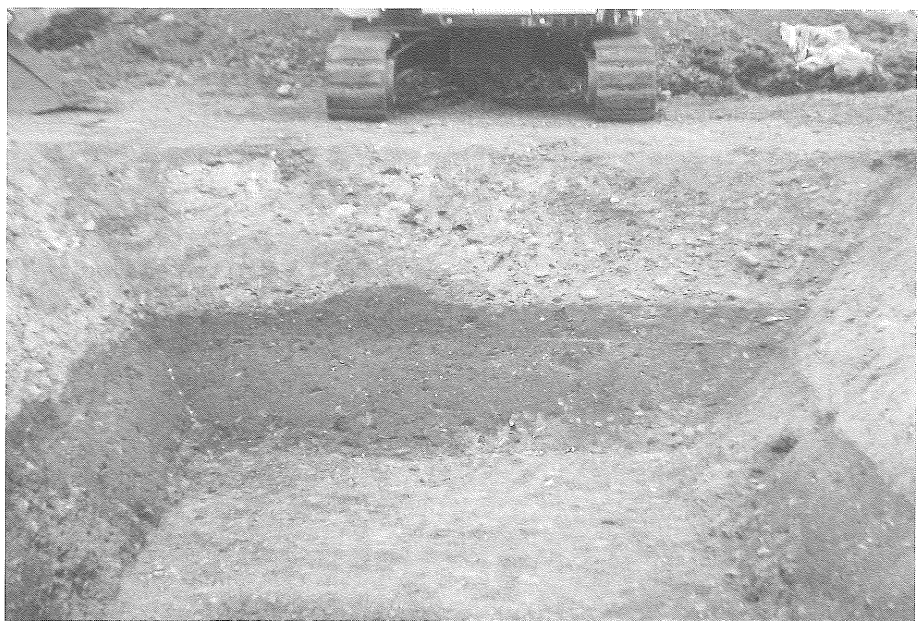


12 B調査区第5層上面
完掘状況(北から)





13 B調査区西壁断面
(北東から)



14 B調査区北壁断面
(南から)

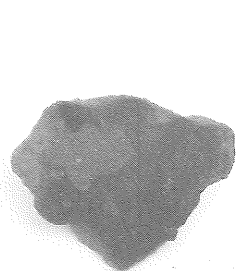


15 C調査区第4層上面
検出状況(南から)

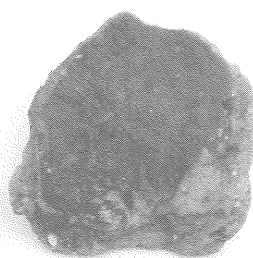


2

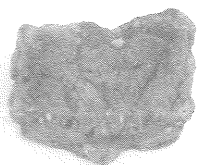
16 A調査区S K24出土遺物



1



10

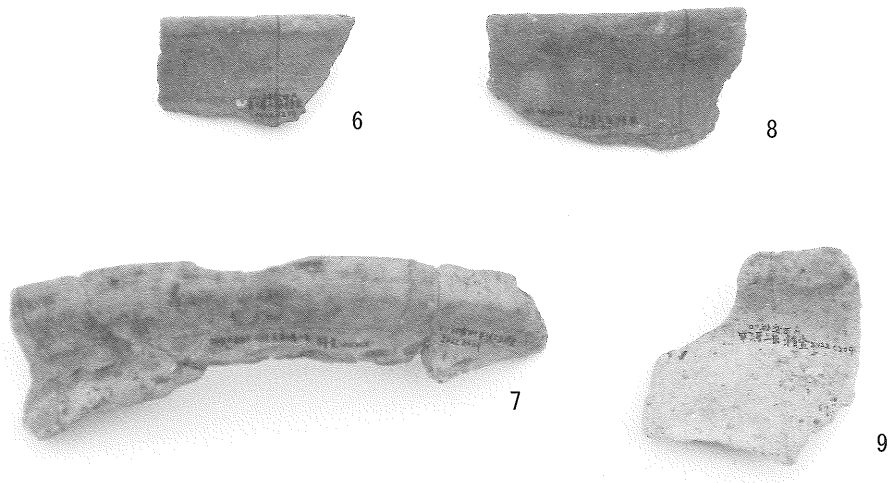


11



12

17 A調査区S K18・包含層出土遺物



18 A調査区包含層出土遺物



19 A調査区S K74出土遺物

抄 録

ふりがな	かぐらでんいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書 名	神楽田遺跡発掘調査報告書							
副 書 名	神楽田遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 94 集							
編著者名	浅田 洋輔・大崎 拳斗・久後 千穂							
編集機関	宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係							
所在地	京都府宇治市宇治琵琶 33							
発行者所在地	宇治市教育委員会							
発行年月日	令和 5 年（2023）12 月 1 日							
所収遺跡名	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	期間	面積	調査 原因
神楽田遺跡	宇治市小倉 町 神 楽 田 46 番 1	26204	71	34 度 89 分 26 秒	135 度 78 分 40 秒	令和 4 年 2 月 1 日 ～ 令和 4 年 4 月 21 日	約 308.64 ㎡	そ の 他 建 物（資 料 館）の建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
神楽田遺跡	集落	弥 生 ・ 平 安～室町	柱穴・土坑・ 溝・堅穴建物		弥生土器・須恵器・ 土師器・瓦・磁器・ 陶器		特になし	
成 果 要 約	弥生時代後期及び平安時代後期末の遺構が検出された。S K 24 からは弥生時代後期の甕がまとまった状態で出土し、S K 74 からは平安時代後期末の土師器皿が欠損の無い状態で出土した。今回の調査成果と昭和 52 年に行われた発掘調査の成果や近隣の他の遺跡における調査成果などを踏まえると当地を含む自然堤防上の旧巨椋池に面した西側の広い範囲に弥生時代及び平安時代から中世にかけての集落が広がっている可能性が推測できるようになった。							

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 94 集

神楽田遺跡発掘調査報告書

発行日 令和 5 年 (2023) 12 月 1 日

発行者 宇治市教育委員会

〒 611-8501 京都府宇治市宇治琵琶 33

編 集 宇治市歴史まちづくり推進課

製 作 有限会社 新進堂印刷所

〒 611-0021 京都府宇治市宇治妙楽 9